敬愛する上島建吉先生へ

金谷良夫

「光陰矢の如し」とは正に的を射た表現であると思います。なぜなら、上島建吉先生が東京大学教授を定年退官され、神奈川大学平塚キャンパスの教授として就任されて以来はや三年が経つからであります。その間、神奈川大学経営学部に「上島先生あり」という栄に浴し、また同時にわれわれもそれに誇りを持っていました。私としては様々な面でご指導をいただき、また公私に渡りお近付きを賜りましたこと、感謝、感激の念にたえない次第であります。知的刺激を受けた私としては、これ以後もずっと直接ご一緒させていただければどんなによかったかという気持ちは否めません。

しかし、人生にはそれぞれ少なからず転換期（ターニングポイント）というものがあると思います。逆に言えば、そうした転換期に恵まれたからこそわれわれは上島先生と三年間共に仕事ができたわけです。人はそれを縁があったのだと言ったり、多少誇張して言えば、運命づけられていたのだと言います。ともあれ縁は異なもの味なものであります。それは投て置き、上島先生が今後英文学のご専門を一層活かされる道を選ばれたことは、広い意味で非常に喜ばしいことだと思います。形は異なっても、今後ともご指導をいただければ幸いに存じます。

上島先生からいただいた貴重な示唆の数々は私の人生に大いなる糧となるでしょう。

上島先生は、東京大学大学院において英文学を学ばれ、その後東京大学教養学部で長年ご研究を積まれました。先生は、『虚空の開拓―イギリスロマン主義の軌跡』（研究社）および『ロマン主義から象徴主義』（学生社）という有力な著書を上梓されており、また論文としても“Wordsworth in Japan”（The Wordsworth Circle）、「詩人Hardyとロマン主義」（『英文学研究』）など数限りないすばらしいご業績があります。最近ではワーズワスによる一七九八―一八〇〇年の『リリカル・バラッズ（Ⅰ～Ⅲ）』（研究社小英文叢書）を洞察力豊かな編注書として出され、われわれの目を奪っています。さらに、

本論集の第三号において「二つの自然観―芭蕉とワーズワス」という名論を書かれています。

「二つの自然観」において、先生は自然に関して実に興味深く且つ説得力ある考えを述べられていますので、ここでその中から一例を引いてみたいと思います。それは、ワーズワスと芭蕉との間の、自然に対する捉え方を、「愛する」(love) と「好き」(like) という言葉のもつ意味に言及し、論じられていることです。それによれば、「『愛する』という感情や行為は他者の意識を前提としている。つまり、自分の外にあり、自分と向かい合う対象をまず意識し、それと合体するか、それを自分のうちに取りこもうとする欲望や意志や行為が『愛』がある」ということ、一方、「『好き』という感情は『性に合う』という意味で、同じ対象でもすでに自分のうちに取りこんでいるもの、合体しているものの再確認である。それは物理的に他者であっても心理的には他者でない」ということです。したがって、そうした差異を通して、「ワーズワスと芭蕉との相異は結局、自然に対して『愛』を中心とする西欧的情念を抱くか、『好き』を基調とする東洋的心境に浸るか」と解釈することができるということであります。イングランド北西部の湖の多い風光明媚な地域の「自然を他者と見て」、それを「恋人」と見、延いては「神に近い存在にまで高め」るワーズワス。江戸深川においてあるいは山河の多い各地を旅し、「自然とともに生き、自然とともに感じていた」芭蕉。こうした二つの自然観の解釈は何と説得力のあることでしょう。

自然の捉え方は、アメリカ文学の代表的作家マーク・トウェインも述べています。ヨーロッパとアメリカの自然に対する人間の受けとめ方の相異について、ヨーロッパにおいては自然は人間に対して常に母であるか妻であるという半ば個人的な関係を示すだろうが、アメリカでは自然は人間に対して、ときどきの気まぐれを除いて、実に邪悪且つ不実且つ悪意に満ちていると。アメリカ人の自然に対する考え方も自然観を考慮するうえで参考となるでありましょう。

講演について特筆すべきは、先生は平塚市民講座として「イギリスロマン派の詩」を三ヶ月に渡りお話をなさっていることです。地元への還元という意味でも非常に意義があったものと思います。

ところで、上島先生から、無論、知の刺激だけを得たのではありません。心の優しさに触れることもしばしばありました。たとえば、それは私の拙い研究発表にわざわざその目的のためだけに大学まで来てくださったことであります。様々な局面においていただいた貴重なアドバイスもまた忘れ難いことであります。

仕事、学問を離れ、一泊二日のテニス合宿の機会にも

恵まれました。スポーツを通して共に汗を流すことは理屈抜きですばらしことですし、いつまでも忘れられない経験になるものと思います。その時の先生の「これからが本番」という言葉が今でも聞こえてくるようです。

最後に僭越ながら申し上げれば、文学とは人生哲学だと思います。人が生きるうえで、人はそれぞれ何らかの哲学を持っているものです。そうした文学を研究する者として、先生と少しでも分ち合える部分があることを嬉しく思います。上島建吉先生には、本当にお世話になり深謝いたすとともに、先生のご健康とご多幸およびご活躍を心よりお祈り申し上げます。